

顕彰状

北大路欣也氏は、1943年、映画俳優の市川右太衛門氏の次男として京都に生まれ、1956年の東映映画「父子鷹」(松田定次監督)で、父子共演の形で映画デビューを果たした。以後、東映時代劇の将来を担う若手として衆望を集め、「花笠ふたり若衆」(佐々木康監督)、「葵の暴れん坊」(山崎大助監督)、「助さん格さん大暴れ」(沢島忠監督)、「徳川家康」(伊藤大輔監督)などで主役をつとめた。昭和30年代終盤から時代劇の主なフィールドはテレビへと移ってゆくが、氏は東映撮影所の時代劇の黄金時代を経験した最後の世代として、映画史に名だたる名監督の現場体験を有する、きわめて貴重な世代となった。

現代劇でも1963年の「海軍」をはじめ、「千曲川絶唱」などのロマンスもの、「ボルネオ大將 赤道に賭ける」など海外ロケを交えた作品などで、キャリアを重ねた。1970年代には、「仁義なき戦い・広島死闘篇」、「八甲田山」などの代表作に出演、「漂流」、「空海」など厳しい自然環境の中での撮影経験をも重ねた。1985年には「火まつり」「春の鐘」「夢千代日記」といった作品に恵まれ、多くの映画賞に輝いている。

一方で1960年代後半から舞台活動にも進出、「シラノ・ド・ベルジュラック」(1964年)、「オンデューヌ」(1965年)、「癡王のテラス」(1969年)、「スカーレット」(1970年)など、劇団四季から三島由紀夫作品、東宝ミュージカルまで幅広いジャンルで活躍した。1974年には、前年の「スルース(探偵)」「フェードル」での演技によって、芸術選奨新人賞を演劇部門で受賞している。その後も「オセロー」、「佐渡島他吉の生涯」、「NINAGAWA マクベス」、劇団新感線「五右衛門ロック」など、きわめて多彩なジャンルの舞台に出演している。

舞台活動と並行して、1960年代後半からテレビドラマにも進出、「竜馬がゆく」(1968年)から現在まで計9作のNHK大河ドラマに出演していることが特筆される。「新宿警察」、「青春の門」(1977年ギャラクシー賞受賞)、「男子の本懐」などのほか、時代劇の領分では新春ワイド時代劇(テレビ東京)など多くのシリーズに出演、大石内蔵助や、父譲りの早乙女主水之介をはじめ、ありとあらゆる時代劇の役柄を演じてきた。現在でも、「華麗なる一族」(2007年)、「半沢直樹」(2013年、2020年)などのようなドラマの要となる重厚な役柄を一手に引き受ける一方、ソフトバンクモバイルのCMでのお父さん犬の声の出演で話題になるなど、現役第一線での活躍を続けている。

日本の映画俳優、テレビ俳優、舞台俳優として、デビュー以来70年近く、これほどまでに、ほとんど途切れたことのない膨大な出演歴と、稀有な幅の広さを兼ね備えて、第一線での活躍を堅持した俳優はいない。この間、菊田一夫演劇賞(2002年)、紫綬褒章(2007年)、浅草芸能大賞(2012年)、旭日小綬章(2015年)、NHK放送文化賞(2021年)、京都市文化功労者(2021年)、京都国際映画賞牧野省三賞(2022年)、文化功労者(2023年)など、受賞褒章の類は枚挙に暇がない。

早稲田大学には、1961年に第二文学部演劇専修に入学、在学中に学生仲間での公演に「リア王」エドガーとして本名で出演、これが初めての舞台となった。卒業式には仕事のために出席できず、父市川右太衛門氏が卒業証書を代わりに受けたという逸話を残している。その後も、演劇博物館「市川右太衛門展」の演劇講座(2001年)や、創立125周年を記念した大隈講堂でのトークショー(2007年)、早稲田大学演劇博物館90周年記念式典(2018年)など、学内の催しへの出演は多い。

北大路欣也氏は、高潔な正義感を体現した青年期から、男性的な魅力をまといながら、底知れない器の大きさをみせる壮年期の重厚さに至るまで、その円熟の芸境を深めてきた。時にはその重厚さを逆手にとった、若々しさや軽妙さまでを演じわけて不動の地位を築きながら、常に最新の話題作に出演を続けてきた。その足跡は、日本の映画とテレビの隆盛期のただなかを経験した点において、すでに歴史的な価値を有し、演劇界においても、一人の俳優にこれほど幅広いジャンルでの活躍が可能な時代があったことを、身を以て示す貴重なものとなっている。

このような、北大路欣也氏の長年にわたる我が国芸術界における多大な功績に対して、早稲田大学芸術功労者として永くその栄誉を顕彰するものである。

2025年4月1日

早稲田大学